

島田正路氏「古事記と言霊」より抜粋

「禊祓」の章に入りましたが、より深く理解するために、やはり整理・運用と黄泉国（日本語を使わない国々のことを示します。）の章も記載します。そのほうが良いと思われまので

その 261 ・その 421（再び記載します。先に進むよりはその方が頭に入りやすいと思われまので、その 400 まで子音の創世（神々の創世）でした。これと言霊 50 音が揃いましたがその整理・運用の段階です。）

五十音の整理・運用 1

古事記の上つ巻きには 初めの天の御中主の神より 三貴子と呼ばれる 天照大神・月読の命・須佐之男命まで 丁度、百の神名が出てきます。この百の神名は 人間の心に関する 根本の道理 百個を謎々

の形で表現したものです。

この道理を形の上で 神社神道が表徴したのが 鏡餅であります。人間の心の鏡となる 百の道という意味  
です。

鏡餅は ご存知のように上下二段のお供え餅からなっています。上は心の構成要素である五十個の言  
霊を表します。下の段はその五十個の言霊の運用法五十を示したものです。

上段は 天の御中主の神 言霊より 火の 夜芸速男の神 ・言霊ンまで五十の神名で表されました。下  
段は五十一番目の金山彦毘古の神より 百番目の須佐之男命までの 五十神の神名で示されています。

前章までのお話で五十番目の火夜芸速男の神・言霊ンまでが出揃いました。鏡餅上段が出来上がったこととなります。そこで今度は鏡餅の下の段のお話が始まることとなります。五十この言葉をどう操作運用して人間の究極の行動規範鏡をつくっていくかの問題です。

そこで これより五十一番目の金山毘古の神 五十二番目の金山毘売の神と話を進めることに致します。がその話に入る前に重要な二つのことについて 申し述べておきたいと思います。

人間の心が 全部で五十個の言霊から成り立っていることはわかりました。今その五十個の言霊もって人間の行動の鏡となる精神構造を作ろうとしているわけです。ところがここでよく考えてみますと 言霊もって鏡を作る道筋は、そのまま私たち人間が日常に営む創造行為や世界的な人類文明創造の政治の方法ともなるものなのです。

古事記の後章に出てくる「禊祓」とは言霊の立場からする創造行為なのであることがお分かりいただけることと思います。これが挿入したい第一のことでもあります。

もう一つのことを申し上げます前章「子生み」のお話で三十二の言霊子音の一つ一つについてできる限りその言霊に即して説明してきました。子音言霊という現象の最小単位の内容に限りなく近づく努力を

しましたけれど、現象の姿を描写する形容詞や比喩の言葉・文章は現象の実相そのものではありません。

やはり種々の概念的説明と同様にあれがお月様だよと指をさす指月の指なのです。

では 現象の最小単位三十二の子音をはっきりと把握する方法は無いのかというところではありません。

ただ一つあるだけなのです。これから検討を始めようとする五十音言霊の操作・運用による行動の規範

(鏡)を作る作業(禊祓)の中に、心の中に鮮明に言霊子音の一つ一つが目に焼き付くごとく自覚  
されてきます。

人間の創造行為の言霊による鏡を作る作業の内に、個人が言霊を自覚する可能性が秘められています。これがぜひ前もってお話したいしておきたい第二の事柄です。詳しいことは後章「禊祓」の章で申し上げます。ことにいたします。

その 262 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

五十音の整理・運用 2

その 262 ・ その 422

古事記の本文に戻ります

この子を生みたまひし によりて、御陰<sup>みほと</sup>やかえて病<sup>こや</sup>み臥せり。たぐりに生りませる神の名は金山毘古の神 次に金山毘売の神。次に尿<sup>くそ</sup>になりませる神の名は波邇夜須毘古の神。次に波邇夜須比毘売の神。次に尿<sup>ゆまり</sup>になりませる神の名は弥都波能売の神。次に和久産巢日の神。この神の子は豊宇氣毘売の神といふ。彼伊耶那美の神は 火の神を生みたまひしに因りて、遂に神避<sup>きり</sup>りたまひき。

この子を生みたまひし によりて、御陰<sup>みほと</sup>やかえて病<sup>こや</sup>み臥せり。

この子とは火の夜芸速男の神のことです。御陰<sup>みほと</sup>の陰<sup>ほと</sup>は靈<sup>ほと</sup>止<sup>と</sup>で子のできる所。伊耶那岐・美の二親神

の婚<sup>よば</sup>ひによって已に 三十二の子（子音）が生まれ、それを火の夜芸速男の神・言霊<sup>ことだま</sup>ンで表音神代文

字で表し、全部で五十個の言霊が出揃いました。

もうこれ以上の言霊は存在しません。もう子は生まれません。伊耶那美<sup>イヘナミ</sup>の命は子を生めなくなったのです。このことを最後に火の夜芸速男<sup>ヒノヨビ</sup>の神すなわち火の神を産んだので、子の出来る所が焼けてしまって病気になる、と洒落た表現をしたのであります。

五十個の言霊が揃いましたから、今からその整理が行われる事と成ります。

**たぐりに生りませる神の名は金山毘古の神 次に金山毘売の神。**

たぐりとは今の言葉で嘔吐<sup>おうと</sup>のことです。けれどここではたぐり即ち手繰りという謎。金山毘古・毘売<sup>かな</sup>の金は神名のことを指しています。言霊を粘度板に刻んだか迦具土を手で手繰り集めると、かな文字の山（金山）ができます。五十音言霊を整理するために、まず五十音神名文字を全部集めた、ということです。金山毘古は音であり、金山毘売は文字のことです。

神社・寺院で備える鐘・鉦<sup>かね</sup>は全てこの神名・神音<sup>かな</sup>を意味する謎です。

次に屎くそになりませる神の名は波は邇に夜や須す毘ひ古この神。次に波は邇に夜や須す比ひ毘ひ売めの神。

屎（くそ）とは組素（くそ）という謎であります。五十音を刻んだ粘土板（埴土・波邇）を集めてそれを一つ一つ点検して行くと、どの音も文字も正確で安定（夜須やす）しているのが分かった、ということとです。この場合も毘古（ひこ）は音を毘売（ひめ）は文字を意味します。

神道で神主が唱える大祓祝詞や古事記の「天の岩戸」の章には「くそへ」「糞くそまり」という言葉が出てきますが、ここに出ました「組素」の意味にとくとく文章が通じます。大祓祝詞の内容は極めて難解に見えますが、言霊の見地に立って見ますと、全編の意味が意味内容が明らかに了解できます。

次に屎くそになりませる神の名は弥み都つ波は能の売めの神



尿<sup>ゆまり</sup>（ゆまり）とは「いうまり」で「五<sup>い</sup>埋<sup>う</sup>まり」という謎です。五<sup>い</sup>埋<sup>う</sup>まりの五とはアオウエイと並ぶ五母音のこと  
 であります。まず五十音を手繰り集め、一つ一つを点検し次に整理のためにすることと言えば、五つの母  
 音を並べる事です。すなわち「五<sup>い</sup>埋<sup>う</sup>（いう）まり」です。

すると言霊アは天位として上に行き、言霊イは地の位で下にあり、その二つに挟まれた形で言霊をオウ  
 エ三音が並びます。神名の弥都波能売とは「三つの葉（言霊）の目」という謎です。三つの葉とは天  
 地に挟まれたオウエの三音のことを指します。日本書紀には弥都波能売を罔象目<sup>みつはのめ</sup>と書いてあります。罔<sup>みつ</sup>  
 は網のことで、母音を縦に五つ並べてみますと、ちょうど網の象の目（罔象目<sup>みつはのめ</sup>）のように  
 分ります。

その 263 ・ 423 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

五十音の整理・運用 3

その 263 ・ その 423

## 次に和久産巢日の神

和久産巢日（わくむすび）とは 杵結びということの謎 五十音を集め 一つ一つ点検し 次に 五つの母音を、並べてみて、網の目になっていることがわかった。

その網の目に合うように 五十音全部を整理して並べてみると、五十音が一つの杵の中に結ばれるように並ぶのがわかったということでもあります。ただしその結ばれ方の意味内容はまだはっきりとはわからない状態です。「和久」は「湧く」ともとれ、まだ杵結びの内容が確定されない混沌さを持っているの意を示しています。

## この神の子は豊宇気毘売の神といふ

豊宇気毘売（とようけひめ）の豊とは前に度々出てきましたように先天宇宙のアオウエ四母音とイ・キシチニヒミリ・杵の イ・杵とそれに挟まれた八つの父韻を表します。豊で先天構造の意です。

宇気はその先天（宇）の性質（気）の意。和久産巢日は五十音言霊図としては内容がまだしっかり確認されていないけれど、それをそのまま活用しても（子とはその働きの意）先天宇宙の性質は秘め（毘売）られているより充分通用する。と言う意味であります。受けは盃（入れ物）の意でもあり、和久産巢日（枠結び）の内容は確認されてはいないが、その整理は先天の内容を受け入れている、の意とも取れます。

### 吉備の児島

以上五十一番目の金山毘古の神より和久産巢日の神までの座を吉備の児島といいます。五十音言霊の整理が始まり、全内容を確認したわけではないけれど、とにかく五十音を一つの枠の中に結んだ段階ということです。

吉備の児島とは「よく備わった締めまり」の意です。島に児が付いているのが初歩の締めくりであることを示しています。さて初歩的にはあるが豊宇気として先天の性質を受け持っているこの五十音の和久結びを天津菅曾（あまつすがそ）（音図）と呼びます。菅曾は菅麻とも書き先天・大自然そのままの性質の音図（すがすがしい衣の意）のことです。

古事記の天の御中主の神より 火の夜芸速男の神までの五十四神が示す言霊五十音を、金山毘古の神から 和久産巢日の神までの六神の区分である吉備の児島と呼ばれる整理作用で天津菅曾という音図が出来上がりました。

それは初歩的ではありますが、人間が自らの心を構成する要素である 五十個の言霊を整理して作った最

初の五十音図です。これ以後五十音の整理検討の作業はこの音図によって行われることと成ります。この音図すなわち天津菅曾という音図は大自然そのままの人間の心、例えばこの世に生まれただけの赤ちゃんに与えられている心の性能の構造と言ったらよいでしょうか。

その 264 ・ その 424 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

五十音の整理・運用 4

その 264 ・ その 424

**彼伊耶那美の神は 火の神を生みたまひしに因りて、遂に神<sup>まり</sup>避りたまひき。**

この文章を文字通り神話として擬人法としてみますと、伊耶那美の神は火の夜芸速男（やぎはやお）の神（（火の炫毘古（かぐひこ）の神・火の迦具土（かぐつち）の神））という頭に火の字が付いている神を生んだので、「御<sup>み</sup>陰<sup>ほと</sup>やかえて病<sup>や</sup>み<sup>こ</sup>臥せり」と病気になる、遂にお亡くなりになった、という意味になります。

けれどその神話が示す原理としてみるとどうなるのでしょうか。それは 三十二の子音が生まれ、その子音を火の神である神代表音文字で表して 麻邇字（まじな）ができたので、伊耶那美の神の仕事はここで一応終わったために、高天原という精神創造の役目から去っていった、ということになります。

この所をもう少し詳しく説明してみましょう。伊耶那岐の神（主体）と伊耶那美の神（客体）が感応同交して、その協力作業によって現象の実相である 言霊子音を生み出しました。

その子音は伊耶那岐・美の二神、父と母から生まれ、父と母の性質を併せ持っていますが、父と母とは別の第三者です。この第三者としての現象が生まれてしまうと、そこで客体である伊耶那美の神の仕事は終わり、その子音を整理・吟味する仕事はもっぱら主体である伊耶那岐の神のものとなります。

卑近な例を挙げましょう ゆで小豆を作るとしましょう。作る主体は人間、材料である客体は小豆・砂糖・塩などです。さて料理が終わり、ゆで小豆が出来上がりました。

出来てしまえば客体としての材料の小豆などの役目はそれで 終わり、その後の吟味である「うまいか、どうか」の判断はもっぱら主体である人間の役目です。当たらずとも遠からずの説明だと思いますがご理解いただけただけでありますでしょうか。

このようにして初歩の音図である天津菅曾（あまつすがそ）の整理は主体側である伊耶那岐の神によって進められていきます。そしてこの整理作業は、後章でお話します禊祓のところクライマックスに 達するこ

とになります。

他方、伊耶那岐の神との共同による創造の仕事を終えた伊耶那美<sup>いよなみ</sup>の神は高天原を去って、本来の自らの世界である客観世界（<sup>よもつくに</sup>予母都国）の主宰者となって 美神独自の仕事を開始することとなります。すなわち物事を自分の外側に見る分野、客観的物質科学文明の創造の世界の事であります。

その 265・その 425 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

五十音の整理・運用 5

その 265 ・ その 425

古事記の文章に戻ります。

かれここに伊耶那岐の命 詔りたまはく、「<sup>うつく</sup>愛（うつく）しき我が<sup>あなにも</sup>汝妹（なにも）の命を、子の<sup>ひとつけ</sup>一木（ひとつけ）に<sup>かえ</sup>易（かえ）つるかも」とのりたまいて、御枕方に



匍匐（はらば）ひ御足方に匍匐（はらば）ひて、哭（な）きたまふ時に、御涙に成り  
 ませる神は、香山の畝尾（うめお）の木のもとにます、名は泣沢女（なきさわめ）の  
 神。かれその神避（かみさ）りたまひし伊耶那美の神は・出雲の国と伯伎（はは）の  
 国との堺なる比婆（ひば）の山に葬（おさ）めまつりき。

伊耶那岐の命の詔りたまはく、「愛（うつく）しき我が汝妹（あなにも）の命（みこと）を、子（ひとつけ）の一木（か）に易（か）へつるかも」  
 とのりたまひて、

伊耶那岐の命は、それまでの創造のパートナーであった妻伊耶那美の神を失って、悲  
 しんで言いました「愛するわが妻、伊耶那美の命（ひとつぎ）を一連（ひとつぎ）の子と代えてしまった」と。

伊耶那美の命を失って、その代わりに三十二の子員が生まれました。その三十二の子  
 音を表音神代文字に表した火（ほ）の夜芸速男（やぎはやを）の神・言靈（ことたま）を得ました。で

すから子の一木とは言霊ンである神代文字のことを指します。

御枕方に匍匐（はらば）ひ御足方に匍匐（はらば）ひて、哭（な）きたまふ時に、

先の五十一番目の神である金山毘古の神から五十音言霊の整理作業が始まっています。  
この愛妻を失って悲しむ伊耶那岐の命の行為も、実はその整理作業を謎で示したものです。整理作業は初めて手にした天津菅麻音図に基づいて行われています。

御枕方とは音図を人間の寝ている姿に喩えますとア行に当たります。御足方はワ行を指します。

御枕方と御足方を匍匐（はらば）うというのは、音図のア行とア行の間を行ったり来たりすることです。哭きたまふ時に、とは声を出して見ることです。ア行とワ行の間を往来して発声してみるとどんな事が起こるでしょうか。

御涙に成りませる神は、香山の畝尾の木のもとにます、名は泣沢女の神。

香山とは書く山の謎。先に言霊ンの火の迦久土の神と同様です。言霊五十音を粘土板に書き刻んで焼いた埴土の集まり、それが今は最初に確認された天津菅麻という音図になっています。

その音図の畝尾と言えはアからワ、オからヲ・・・に到る横の列（アオウエイの各段）のことです。

悲しんでア行とワ行の間を往き来して、泣いた涙は畝尾の一番下の段に落ちます。

するとそこに母音イと半母音ヰの間に展開している八つの父韻チイキミシリヒニが存在していること、そしてその父韻というのは泣き騒（沢）ぐ神（言霊）であることが確認されます。泣き騒ぎ、かしましいといえは普通女性を連想します。そこで泣沢女と女の字が付けられたのでありましょう。

その 266・その 426 につづく

この大自然の無音の音を言霊でアオウエイの五母音で現わしました。宇宙にはこの五母音しか存在しません。お寺の鐘を撞くとゴーンと聞こえます。でも実際には鐘は無音の震動の音波を出しているだけなのです。

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

五十音の整理・運用 6

その 266・426

あずき  
小豆島おほぬでひめまたの名は大野手比売

この泣沢女の神の座、すなわち音図上に初めて確認された八つの父韻の締めくくりの区分を小豆島と言います。八父韻は音図上で小豆すなわち明らかに続く氣の区分であります。

別名おほぬでひめ大野手比売とは大いなる横（ぬ野・ぬ貫）に並んだ働てき（手）を秘ひめていひめる（比売）の意味であります。八父韻は音図に於いては横に一行に展開しています。

音図に於ける横に並んだ八父韻は現象が現われ出てくる時間的判断の基本となる。

それに対し音図の縦に並んだ5つの母音の配列は現象の空間的・次元的相違の判断力の基礎となるのである。

音図上の八父韻の確認を泣沢女の神と呼んだのは何故か、もう少し詳しく説明してみましょう。

泣沢女の神とは泣き騒ぐ、の意味だと申しました。また泣き騒ぐ、ととっても良いでしょう。その鳴き騒ぐ音とは図で示されます天津菅麻音図のイと牟の間に展開するチイキミシリヒ二の八つの父韻です。

父韻が鳴き騒ぐ音であるのに対し、それ自身決して騒がない音がアオウエイの五母音です。仏教でこれを梵音と呼ぶように大自然宇宙の音です。この大自然の宇宙は決して鳴らないがそれに何かの刺激が加えられると、無限に現象の音を出すエネルギーに満ちておりますので、宇宙の音を「無音の音」などと呼ぶことがあります。

雨上がりの空に七色の虹が見えます。けれども実際には7つの光波を出しているだけです。それが何故ゴーンと聞こえ、虹が虹色に見えるのでしょうか。同様にピアノは鳴っていません。唯空気の振動の波を出しているだけです。それが妙なる音楽として聞こえるのは何故でしょうか。

鐘をゴーンと聞き、虹を七色と身、ピアノをポンと聞く現象の仕掛け人、それが八つの父韻です。人間の創造知性であります聴覚や視覚のリズムとシンクロナイズする時、初めて現象が生まれます。

鐘の音を聞き、森の緑に心を癒やす物事の現象を創り出す知性のヒビキは飽くまで主体側の活動なのでありまして、客体側には無いものです。泣き沢ぐのは父韻であり、人間の創造知性の側の仕事であって、その働きの刺激によって宇宙である五つの母音から現象が出てくる、ということなのです。

八つの父韻の確認を泣沢女の神と呼ぶ理由をご理解いただけただけでしょうか。

その 267・その 427 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

五十音の整理・運用 7

その 267・その 427

かれその神<sup>かみさ</sup>避りたまひし伊耶那美の神は・出雲の国と伯伎<sup>ははき</sup>の国との堺なる比婆<sup>ひば</sup>の山に

<sup>おさ</sup>葬めまつりき。

頭脳<sup>の</sup>先天構造<sup>の</sup>ことを昔の言葉で真奈井と呼びます。真奈（真名）である言霊がこんこんと湧き出る井戸という意味です。その言霊が現われる原因である父韻（泣き沢ぐ神）の働きは頭脳から雲のごとく出てくるように感じます。出雲は出る雲の謎です。出雲の国とは父韻を現わします。

伯伎は母の木<sup>の</sup>ことでアオウエイの五母音の謎です。聖書では生命の樹と呼びます。

比婆とは霊の葉の謎です。言霊のことを指します。言霊の中でも特に三十二の言霊子音を<sup>ひ</sup>霊または<sup>ひか</sup>光りの言葉と呼びます。

夫神である伊耶那岐の神と共同で三十二の子音を産み、仕事を終えた伊耶那美の神は何処に葬られているか、<sup>と</sup>いうと、父韻と母音で作られた三十二の子音の中に隠され、葬られていますよ、<sup>と</sup>いう訳であります。言霊子音が客観世界に去って行った伊耶那美の神の活動の名残なのだ<sup>と</sup>いう意味です。

その 268・その 428 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

五十音の整理・運用 8

その 268・その 428

古事記の文章を先に進みましょう

ここに 伊耶那岐の命・御佩（みはかし）の十拳（とつか）の剣を抜きて、その子迦具土（かぐつち）の神の頸（くび）を斬りたまひき。ここにその御刀（みはかし）の前に著ける血、湯津石村（ゆついわむら）に走（たばしり）りつきて、成りませる神の名は、石折の神（いはさく）。次に根折（ねさく）の神。次に石筒（いはつつ）の男の神。次に御刀の本に著（つ）ける血も、湯津岩村に走りつきて成りませる神の名は、甕速日（みかはやひ）の神。次に樋速日（ひはやひ）の神。次に建御雷（たけみかづち）の男の神。またの名は建布都（たけふつ）の神。またの名は豊布都（とよふつ）の神。次に御刀の手上（たがみ）に集まる血・手俣（たなまた）より漏（く）き出て成りませる神の名は、闇添加美（くらおかみ）の神。次に闇御津羽（くらみつは）の神。

菅麻音図を基として五十音言霊の検討はさらに進められます。一節ずつ説明して行きましょう。

伊耶那岐の命・御佩（みはかし）の十拳（とつか）の剣を抜きて、その子迦具土の神の頸（くび）を斬りたまひき。

迦具土の神とは 言霊ン（表音神代文字）を示す火の夜芸速男の神の別名 火の迦具土の神のこと

です。その頸とは組霊の謎で、霊である言霊を組んだもの、のこと、ここでは 菅麻音図を意味します。

今まで五十音言霊の一つ一つの検討が続けられてきて、これからはその五十音によって、組まれた人間の精神構造全体についての検討が始まることになります。

ここに古事記で初めて十拳の剣と言って剣という言葉が出てきました。古事記においても同様ですが、一般に神話や宗教所にある剣というのは、も物体を切る刀のことではなく、頭の中で物事の性質を検討するための天与の判断力のことを言います。

この判断力は大きく分けて3つの種類があります 十拳剣・九拳剣・八拳剣です。

ではここに出てきた十拳剣とはどんな判断力の事を言うのでしょうか。十拳のとは握りこぶしを10個重ねた長さの剣ということですが、もちろんそれは謎の言葉です。精神上的の剣の場合、十拳ということは十とゆう数を示します。



十拳剣とは物事を十数を持って検討する判断力のことです。十数で判断するといっても見当がつかないかもしれません。十数とはア・タカマハラナヤサ・ワと横に十個の言霊が並ぶ天津太祝詞音図と呼ばれる五十音図が後章登場しますが、その音図に示される精神構造に基づいた判断、ということなのです。後ほど詳しく説明されるでしょう。

そして十拳の剣は主として天照大神または伊耶那岐の神が用いる判断力です。

十拳剣で迦具土の神の頸を切った、ということは表音神代文字で表された五十音図を十拳剣と呼ばれる人間の精神構造の判断力を持って、分析・検討を開始したということになります。

「注1」 九拳剣とは九数を持ってする判断力であり、その実態はア・タカマハラナヤサの九言霊であり、月読の命が使う判断力のことである。

八拳剣とは八数を以てする判断力であり、その実体はカサタナハマヤラの八言霊で、須佐男の命がこれを用いる。

十九八の数の違いは、何処からくるか、というと八つの父韻の両側にある母音ア（私）と半母音ワ（汝）の完全な自覚が備わっているか、否かに関わっている。九拳剣は宗教哲学の判断力であり、八拳剣は科学的判断力である。詳しくは後章。

「注 2」 古代には概念的な用語がなかった。そのため精神的なものを表すのに 物質的に意味を同じくする器物でそれを示した。剣もその例である。剣は刀と違って両刃である。断ち（分析）と連氣<sup>つるぎ</sup>（総合）の両面の判断力を意味する。物事の性質を調べるには分析と総合の両面が必要である。剣の他に杖という場合も判断力のことである。聖書にはアロンの杖がある。

その 269・429 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

五十音の整理・運用 9

その 269・429

ここにその御刀（みはかし）の前に著ける血、湯津石村（ゆついわむら）に走りつき  
て

迦具土の神の頸である五十音言霊の集まりを、十拳剣で分析・検討して、人間の心の構造がどうなっ

ているかを調べる作業が始まります。御刀に著いた血とは、分析してわかった道理（血）ということ。御刀の

前さきまというのは、次の文章で、「前さきま」の次に御刀の「本」、御刀の「手上」と分析・検討が進展して行く様子

を示すためです。

湯津石村の湯津は五百個の謎です。アオウエイの五母音を基調とし、五十音を上下に取った百音図のことです。石村は五十葉叢で五十音図のこと。湯津石村全部で五十音図をさします。

文章全体で五十音の一つ一つの集まりを分析検討する主体側の心の構造とその動きが、五十音図の構造と結びつき（走りつきで）その関連で分析・整理・運用の道理が次第に明らかになって行く、ということでもあります。

「注1」 湯津（五百個）と書かれた場合の百音図は後五母音を基調として作られた五十音図を上下に撮った百音図を想定している。この場合上の五十音図は心の構成要素である五十

問言霊の配列を、下の五十音図は上の五十音言霊の整理・運用法五十を意味している。

上下で百個の道理ということである。

### 成りませる神の名は、石折の神。

石折（いわさく）は五葉裂（いはさ）くの意。分析の結果、まず五十音言霊がアオウエイの五つの段階に分割されることが分かった、ということです。言い換えますと、人間の精神宇宙とは五つの次元がたなわっている構造を示していることが分かった事であります。

人間の精神に関する一切のものはこの五つの次元宇宙から現出してくるものであって、それ以外のものはありません。この「五葉裂く」の道理も道理は、世界の宗教は哲学宗教の基本であります。

この「五葉裂く」の道理は人々が会話する言葉に注目しているとよくわかります。心が言霊ウの次元に住む人同士の会話は各自自分が経験した事柄をその体験の順序通りに一部始終喋ります。勢い会話は長くなります。若い同志の電話の会話はその典型です。

オの次元に住む人の会話には抽象的概念的言葉がやたらと出てきます。社会主義新聞の論説などはその見本とも言えます。

言霊アの次元では詩や歌が、

言靈工の次元では「かくすべし」の至上命令がその典型的言葉となります。

言靈イの次元からは言靈が、そして他のウオア工の次元に住む人々の心に合わせた自由自在の言葉が出てきます。

「注1」 社会の用語のいくつかを石折の道理によって分類した表を掛けて置く 小笠原高次氏「言靈

百神」より

土	脾 (胃)	天菩卑 命	伊耶那 岐の神	布斗麻 邇	総持	生命意 志	仏陀	イ	五
火	心(小 腸)	天津日 子根の 命	国之常 立の神	至上命 令	道徳的 実践	理 性 (実践 智)	菩薩	工	四
木	肝 (胆)	熊野奇 霊命	高産巢 日の神	詩歌	芸 術・ 宗教	感情	縁覚	ア	三
水	腎(膀)	天の忍	天の常	抽象的	自然科	悟 性	声聞	オ	二

	朧)	穂耳命	立神	概念	学	(経験 知)			
--	----	-----	----	----	---	-----------	--	--	--

その 270・その 430 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

五十音の整理・運用 10

その 270・その 430

### 次に根折ねまきの神

次に根折ねまき神、は音裂ねまきくまたは根裂ねまきくの意味。音と取れば泣沢なみさわぐ音のことと成ります。現在検討している

菅麻音図は母音がアオウエイと並び、その根とは最下段の言霊イであり、音図全体で 言えば八つの父

韻のことです。現象を生む創造意志の原律である八つの父韻がどのような順序で並んでいるか、が検

討・確認されることとあります。



### 次に石筒いはつつの男おとこの神かみ。

石筒いはつつは 五葉筒い はつつまたは五十葉筒い はつつの意味。五十音言霊ごじゅうおんごんまずは縦にも横にもそれぞれの列が一本の筒のよ  
うに、人間の心が動く通路のように連続して変化・進展しているのだ、ということが確認された、ということ  
です。

天津金木音図を例にとりますと、五母音アイウエオも 横の上段ア・カサタナハマヤラ・ワも一本の通路のよ  
うに一定の内容をもって連続して変化・発展しています。石筒の神と書かずに石筒の男の神と男の字が  
付けられているには理由があります。このことはすぐ後に出てくるだ建御雷の男の神の項で説明致します。

次に御刀の本に著ける血も、湯津岩村に走りつきて成りませる神の名は、<sup>みかはやひ</sup>甕速日の神。

人間の心を構成している五十個の言霊を検討して、まず初歩的なまとめ方としての和久産巢日の神

(天津菅麻音図)を得ました。そしてその初歩的に確認された音図を分析することによって 伊耶那岐

の命自身の心のあり方を確認してゆくことになります。

「御刀の前」先の次に「御刀の本」と分析・検討が進展して行く度合いを示します。そこで分かった事柄が

五十音言霊図(湯津石村)と比較・参照されて、心の構造の道理(血)がさらに深く甕速日の神

と確認されました。甕速日の神の甕はアイウエオ五十音を粘土版に掘り刻んで素焼きにしたもので言霊

図を指します。

速日の日は言霊の霊のことです。速日とはその言霊が音図上の でどのような内容を表しているか、が一目で（速）分かるようになっていることが確認されたことであります。五十音言霊図を見るのに 2 通りの方法があります。

その一つである甕速日は言霊全般の上で一つ一つの言霊の集まりが何を表しているか、がひと目で理解できるように整理検討されたのであります。いわば言霊図を静的な状態で置いて検討した事、と言うことができます。静的な言霊の検討と言えば天津金木音図、天津菅麻音図・・・等五十音言霊音図もその例であります。

**次に樋速日ひはやひの神。**

樋速日の樋は水を流す道具です。ですから樋速日の神とは言霊図の上で言霊がどのように連続しながら

変化・進展して行くか、が一目で分かるように観察し、確認したことであります。

甕速日の静に対し、樋速日は動的状態変化の確認ということができましょう。人間の心を見るにも、心の全貌がどのような状態になっているか、という見方と、心がどう変化・連続しているか、を調べるという二つの見方がある事と同様であります。

言霊の動的状況の検討とえば、先の「子産み」の章で見ました「タトヨツテヤユエケメ・・・」の子音が生み出るまでの心の働きの順序や石上神宮に伝わる布留<sup>ふるる</sup>の言本<sup>こともと</sup>と「ひふみよいむなやこと・・・」等が例として挙げられます。

ここに甕速日、樋速日と速日という言葉が出てきました。速日と同じ意味の言葉に早振りがあります。言霊の立場で見ると、物事の性状・進展の内容が一目で分かることを言います。このことを「言霊<sup>ことだま</sup>の幸倍<sup>さちばえ</sup>へ」とも言います。

その 271・431 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

五十音の整理・運用 11

その 271・その 431

次に建御雷<sup>たけみかづち</sup>の男の神。 またの名は 建布都<sup>たけふつ</sup>の神<sup>かみ</sup>。 またの名は 豊布都<sup>とよふつ</sup>の神<sup>かみ</sup>。

建<sup>たけみかづち</sup>御<sup>たけ</sup>雷<sup>たけ</sup>の建<sup>た</sup>は田<sup>た</sup>氣<sup>け</sup>の意<sup>た</sup>であります。田<sup>た</sup>とは人間の人格全体を五十音言霊で表した言霊図の事です。

また 言霊図は田の形に似ているので、言霊図の例えに用いられます。田の氣とは五十音図の氣ですから言霊をさします。

雷<sup>いかづち</sup>とは五十<sup>い</sup>神<sup>か</sup>土<sup>つち</sup>の謎<sup>ち</sup>で五十音を粘土板に書いたものです。雷は天がどよめき轟く自然現象です。ところが人間の言葉も心の先天（天）が活動すること（神鳴り）によって現れる現象であります。

この神鳴り（雷）に五十個の要素と五十の基本の変化があります。この要素である五十個の言霊とその変化を点検してまず初歩的な和久産巢日<sup>わくむすび</sup>という五十音言霊図（天津管曾<sup>あまつすがそ</sup>）にまとめました。

その音図を主体の判断力の十拳剣で分析・検討して行き、心の静的な構造（甕速日）と動的な構造（樋速日）が明らかに確認されたのでした。

その結果、五十音言霊によって組織された人間の理想の精神構造が主体である伊耶那岐の命の心に完成・確認されました。

この構造を<sup>たけみかづち</sup>建御雷<sup>お</sup>の<sup>かみ</sup>男の神と呼びます。

先に出ました石筒の男の神もそうですが、建御雷の男の神と共に「男」という字がついているのはなぜかここで説明しましょう。はじめに伊耶那岐の命は 妻の神伊耶那美の命と共同で三十二の子音を生まれました。それを粘土板に書いて火の迦具土の神という神代表音文字を作りました。

言霊を文字に表したところで伊耶那美の命である客体の役目は終わります。美の命は 客観世界に去り、五十音を点検・確認する仕事はもっぱら岐の命（主体）の役目となります。

そこで最初に手にした五十音図<sup>あまつすみがそ</sup>天津管曾音図を主体の判断力である十拳剣によって分析・検討し、精神の理想構造として建御雷の男の神を得ました。この原理はやがて言霊学の総結論である「<sup>みはらうづみこ</sup>三貴子」の大原理を生み、また天孫降臨に際して大国主命に国譲りを説得する原理ともなったものであります。

ただし理想の精神構造が完成確認された、と言いましてもそれはあくまで伊耶那岐の命 という主体の心



の中だけで完成・確認されたのであって、それがどんな場合にも適用を応用しても妥当であるという証拠は出ていません。そこで主体の中でのみの確認・完成された心理だということを強調して主体を表す「<sup>お</sup>男」の字が付けられているというわけでありませぬ。

この主観の中での真理が客観的・絶対的真理となるためには、その心理を客観的世界に投影・適用してそれが真理として通用するか、否か、を確かめなければなりません。その作業は 後章「<sup>よみくに</sup>黄泉の国」と「<sup>み</sup>身<sup>そぎ</sup>禊」のところで詳細にお話することと成ります。

建布都とは田気である五十音図を構成する言霊を運用して、都すなわち理想の精神構造図を組織（布）したことの意。 都とは言葉によって組織された理想の精神構造を意味すると同時に、その原理を運用する政治の府も指します。

豊布都の豊は十四で母音と父韻の先天構造の原理のことで、豊布都はその原理によって言霊を組織することの意味であります。建布都・豊布都ともに、奈良県天理市布留にある石上神宮の十種の神宝の中の神剣の名前でもあります。

「注1」 学生が心理学の講義を聞く。これは耳学問である。自分の心を反省し、自分の心が確かに講義の学問の通りに構成され、活動している、と確かめて初めて自分にとっての真理となる。

これを自証という。しかしこれはまだ主観的心理の域を出ない。この主観的心理を客観的に幾多の人間

や社会に適応して、そこに誤りがないとき、客観的な真理として認められる。これを他証という。自証と他証がともに成立するとき、その心理は絶対的真理である。

その 272・その 432 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

五十音の整理・運用 12

その 272・432

次に御刀の<sup>たがみ</sup>手上に集まる血・<sup>たなまた</sup>手俣より漏き出て成りませる神の名は、<sup>くらおかみ</sup>闇淤加美の神。  
次に<sup>くらみつは</sup>闇御津羽の神。

心の中に建御雷之男の神という主観的大原理を確立した伊耶那岐の命は、その原理を物事に適用し

て真偽を判断する方法の検討に入ります。その方法に二通りあり、一つは<sup>くらおかみ</sup>闇淤加美であり他の一つは

<sup>くらみつは</sup>闇御津羽であります。

十拳剣による分析・総合の検討が「御刀の前」「御刀の本」「に続いて「御刀の手上」と進展してきました。

この時、血が「手僕より漏き出でて」という一風変わった表現を使いましたのは、出てくる神の名 闇淤

加美・闇御津羽に関係しているからであります。

以下説明して行きます。人間は宇宙の中に現出するあらゆる現象や、現象と現象との間の関係を調べ

る手段として数を使います。その実体は先に伊耶那岐の命が迦具土の神の首を切った十拳剣と言われ

る十個の言霊です。主体アと客体ワとその間を結ぶ八つの父韻合計十個の言霊です。であります、数

として十の操作は手の十の指を曲げたり伸ばしたりする動作によって 行なわれます。この指の屈伸の動

作を御手繰と呼びました。

建御雷の男の神という大原則を基本として、この御手繰の動作によって物事の道理が現れて出てくることを「血（道理）が手俣より漏き出<sup>たなまた</sup>て」と古事記は洒落た表現を使ったのでした。

御手繰には二つの方法があります。一つは十本の指を曲げていくことです。これが 闇<sup>くら</sup>淤<sup>か</sup>加<sup>あ</sup>美<sup>かみ</sup>です。指を一つ一つ順に繰り（闇）噛み合わせる（於<sup>あ</sup>加<sup>か</sup>美<sup>み</sup>）の意味であります。十本の指を次々に 12345・・・と折り曲げて行って最後に十本全部を握り終わった時、物事の内容の全てを十数によって把握・理解したことになります。この形を昔幣<sup>にぎて</sup>（握手<sup>にぎて</sup>）と言いました。物事の全部を掌握した和<sup>わ</sup>の形ですから和幣<sup>にぎて</sup>とも書きました。

迦具土の神の頸を十拳剣で斬り、その構造を分析・総合して武御雷の男の神という理想の精神構造を

心の中に完成しました。この理想の構造を示す言霊図を基準として、宇宙の間の一切の現象の道理を  
掌握しようとするのが闇淤加美の神であります。

事物・現象の実態である言霊と、その操作運用をする方法を表す数の理（この数の理を数霊）と言  
います。の二つで事物を掌握する時、物事を最も簡単に、しかも正確に把握することが出来たことになりま  
す。この事を古代神道は和幣にぎてと言いました。

神社に紙や布で作った電光形のもので飾ってあるのをご覧になりましょう。これは幣にぎてまたは御幣みへいと呼ば  
ます。闇淤加美の神の内容を示した謎であります。昔の子供はお金のことを「握握にぎにぎ」と呼びました。お金と  
は世の中の生産物の価値を掌握したもの、という意味を表しています。神前にお供えをする社会の生産  
物を「みてぐら」（饌）と呼びますのも、それが勤労の結果を表しているからであります。

「注 1」 大和の石上神宮の教えに「 一二三四五六七八九十と唱えて、これを これに玉を結べ」とあります。玉とは言霊のこと。言霊と数霊とで事物の内容を把握することが最良の理法であることの教えであります。

その 273・433 につづく

五十音の整理・運用 13

その 273・433

御手繰のもう一つの方法は闇御津羽であります。指繰って（闇）生命の知性の権威（恵み）である御稜威（御津）を鳥の羽の広がるように現わし示す。ということです。この操作は 闇淤加美とは反対に握っている十分本の指を一二三四五・・・と順に伸ばして起こしていくことです。

この操作を起き手といいます。建御雷の男の神ということ言霊図の原理を色々な現象に適用してその時

処位に応じて処理して行く事であります。

起きては掟の語源です。



闇淤加美で掌握した声明の原理・法則を実際に「第一条 和を以て貴しとなす 第二条・・・」（聖徳太子の十七条の憲法）の如く社会の法律として制定し、これを世の中の定めとして 社会を運営して行くことでもあります。

以上説明してきました石折の神から闇御津羽の神まで八神の名前が示している検討・操作によって主観内に於いてではありますが武御雷の男の神という理想の精神構造完成し、その構造図を基として事物の原理の掌握とその活用方法（闇淤加美）（闇御津羽）が確認されたのであります。

大島またの名を<sup>おおたまるわけ</sup>大多麻流別

石折の神より闇御津羽の神までの八神の操作が心の中に占める区分を大島といいます。大きな価値・権威を持った心の締めりです。またの名は大いなる（大）言霊（多麻）が 流露・発揚（流）する、心の区分ということです。

繰り返して強調させていただきますが、古事記の初めの天の御中主の神よりこの章の闇御津羽の神までが五十音言霊とその操作によって、あくまで 主体内の自覚としてではありますが、言霊布斗麻邇の原理が建御雷の男の神として一応の完成をみたこととなります。この主観的に完成された言霊原理が、客観世界に投影適用されて、その原理が主観的であると同時に客観的にも真理であることを確認する言霊原理の最終的行程は後章より始まることと成ります。

その 274・434 につづく